

## 就職難と自殺

警察庁の調査によると、昨年、大学生など150人が就活の悩みなどで自殺しており、その数は07年の2.5倍に達していることが分かったとのこと（5月8日付読売新聞）。

そもそも、我が国は年間の自殺者が3万人を超えるという自殺大国で、こうした異常な状態が1998年以来14年連続して続いています。

自殺の原因には、自身の病気や失業、事業の失敗、家庭内の不和等様々であり、自殺した人には、それぞれに止むに止まれぬものがあったに違いありません。しかし、どのような事情があったにせよ、自殺すること以外の選択肢を見つけることが出来なかったことは、誠に残念に思います。

自殺するということは、これからの人生の全て、将来の可能性までも含めて全て断ち切ってしまうことになります。「自分の命なのだから、自殺しようかどうかと勝手に勝手だ」と考えているとすれば、それは大いなる過ちです。我々は、人知の及ばざる力によって誕生し、様々な人々の支えによって生きてきたのであり、決して自分の勝手にして良いというものではありません。

特に、「就職に失敗したことが理由で自殺」ということを聞いて、私は愕然としました。

社会に巣立つ第一歩から躓くというのは、悔しいだけでなく、将来への不安も大きいと思います。また、沢山の会社にエントリーしながら悉くはねつけられれば、自分の全て、人格までもが否定されたかのように感じてしまうのも止むを得ません。

自殺を決意させるというのは、それだけ絶望が深いということでしょう。しかしそれでも、あえて私は「就職に失敗した位で、何故自殺なんかするんだ！」と申し上げたいと思います。

今年春の就職戦線は、一区切り付きました。結果は、大卒の就職率は93.6%と過去最低だった前年を2.6ポイント上回っています。また、高卒の就職率も94.8%と前年を3.4ポイント上回っています。このように、今年の就職率を見る限り、最悪の状況を脱したかに見えます。にもかかわらず、就職に失敗

して自殺する若者が増えているという現実、余りにも悲しい皮肉としかいいようがありません。

勿論、就職率が向上したとはいえ、就職できた若者達の中には、妥協して希望とは違う選択をした人も多いと思います。また、正社員としてではなく、派遣職員や非正規の職員として就職した人もいることでしょう。そういう意味では、若者達の就職戦線には依然として厳しいものがあります。

その一方では、就職難といわれているながら、中小企業では人材の確保が難しいという雇用のミスマッチが起こっています。若い方達には、大企業に寄りかかって安定を求めるだけでなく、たとえ中小企業であっても、自分の力を活かすことによって、自分も会社も共に成長を目指すという道もある、ということを知って欲しいと思います。

「死ぬ気になれば何でもできるはずだ」等と軽々しくいうべきでないことは、分かっているつもりです。しかし、死ぬという重大な決断をする前に、一度立ち止まって考えて欲しい。今までの選択の方向は適当だったか、これしかないと思っていた道が本当に自分にとって相応しい道だったのかどうか、ということ。

先程、自殺をするというのは、それだけ絶望が深いからと申し上げましたが、東京大学の玄田有史教授は「希望の作り方」という本の中で、絶望の反対語は希望ではなくユーモアだと思うと述べています。私たちは、良く若者に夢や希望を持ってといいます、何よりもまず、ユーモア精神を忘れるなというべきかも知れません。

そもそも人間は、「死んで花実が咲くものか」です。生きているからこそ悩みもするし、苦勞もするのです。

就活で汗をかいている皆さん、そのご苦勞は、生きている証拠です。諦めず頑張ってください。(塾頭 吉田 洋一)